

卒業研究 題目「ジャズダンスとルイジ」

英文題目「Jazz Dance and Luigi」

1K03A038-1 氏名 大野周平

指導教員 主査 杉山千鶴 先生 副査 寒川恒夫 先生

本論文の目的は、筆者の大学生活の中心となったサークルやスクールで学んだジャズダンスに関して、その奥深さ、素晴らしさ、歴史、そしてその発展などを詳しく知りたいと思い、ジャズダンスの先駆者と言われるルイジ・ファチュート *Ruigi faccuito* (1925-) に着眼した。彼を知ることにより、ひいてはジャズダンスに関する知識を広め、理解を深めるものと考えたからである。そして本論文では、ルイジの経歴、人々との関わり、その独特のメソッドを通して彼の舞踊理念とジャズダンス界全体における位置付けを試みた。以上について第1章で述べた。

第2章ではまず、ジャズ音楽とジャズダンスの発展に関して述べた。ジャズ音楽が生まれた背景とジャズダンスが生まれた背景には、共に、黒人の文化・社会的地位などが関係していた。そしてどちらも黒人社会と白人社会の合わさったものと考えていいだろう。ジャズダンスの方で言えば、ルイジにより体系化された（ヨーロッパのアカデミック・テクニク＝バレエ・テクニクを取り入れた）ユーロ・アメリカン・ジャズダンスと、イノセントリズムを基礎とした黒人ジャズダンスの融合により、現在のジャズダンスを形作ったということである。

第3章では、ルイジの経歴や転機・復活から、かれの最も偉大な功績ともいえるルイジ・エクササイズが出来る過程について述べた。

彼は、幼い頃から歌やダンスなどのエンターテインメント性に優れ、数多くのタレントショーで受賞をしていた。様々なオーディションを受け、舞台上で活躍をしていた。その活躍が認められ、ミュージカル映画に携わるべくジーン・ケリー *Gene Kelly* (1912-1996) に勧められてハリウッドへと渡った。

しかしロサンゼルスに移ってから2ヶ月経たないうちに、彼は大きな交通事故にあってしまう。頭蓋骨挫傷で10日間意識不明の重症を負い、助かりはしたものの、片目は失明し（現在も見えないまま）、半身不随となったのだ。現在も顔面の部分的な麻痺は消えていない。

だが、彼にとっては、そのことがまさに人生の転機であった。この事故をきっかけにして彼のメソッドは生まれた。半身不随となってしまったのにもかかわらず、彼は舞台に

復帰するつもりだった。そしてそのためのリハビリを、彼は独自の方法で始めた。そのリハビリが、他ならぬルイジ・エクササイズの原点であり、全く動かなかった身体をコントロールするための方法を知った。そうやって得たものを順序立てて一連の運動にし、新しいトレーニング・メソッドを開発したのである。またその中で、彼の大原則である、「Never stop moving」（決して立ち止まらずに）、「Feeling from the inside」（内側から感じるままに）、という言葉が生まれた。

彼は見事に復帰を果たし、80を超えるミュージカル映画に出演した。彼はその待ち時間には、常に身体を温めておくために、エクササイズを行っていた。それを見た若いダンサーたちは、その素晴らしさに引かれ真似し始めた。1950年頃からはレッスン指導も始めた。そして1956年に自身のスタジオ“*The First World Jazz Centre*”をニューヨークに開設し、彼のメソッドを指導する場とした。

第4章では、トレーニング・メソッドと彼の舞踊理念、そしてルイジ・エクササイズがどのような動きをするものなのかを、写真入りで説明した。

第5章では、彼に大きな影響を与えただろう二人の人物、ジーン・ケリーと伊藤道郎について述べた。

ジーン・ケリーは、「ルイジ」というニックネームを与えた人である。また伊藤道郎はユーリズミックスというアームズ・ワークを生み出したが、ルイジはそれを学び、ジャズダンスのためのアーム・ポジション、L・リズムミックスを作り出した。

第6章ではルイジの功績そしてエクササイズの意義について述べた。

どのようにして彼のメソッドが世界中に広がっていったのか、そして彼がジャズダンスの先駆者と言われる由縁について、ルイジに関する記述から検討・考察した。

最後の第7章ではこれまで述べてきたことを踏まえて、本論文の目的である、ルイジの、ジャズダンス界における位置付けを試みた。